



名大祭フォークダンス風景（『第13回名大祭パンフレット』より）

これらのテーマアピールには、一九六〇年代のいわゆる高度経済成長期のなかで、受験競争社会をくぐり抜けてきた学生の真情が示されていると思われます。

## 五、時代を映す名大祭③—一九八〇年代

### ◆テーマの簡潔化

名大祭一覽（3）には、一九八〇年代における名大祭のテーマなどを示しました。第二回名大祭以降は、サブテーマが設けられなくなっている点に一つの特徴があります。また、もう一つの特徴として、すでに一九七〇年代からみられたメインテーマが短

## 名大祭一覧（3）

回	開催年（日程）	テ ー マ	
		メ イ ン	サ ブ
21	1980年 （6/10-15）	輝け 我ら知の銀河	押し寄せる暗闇 引き裂く若き エネルギー 込み上げる胸の疼 き 熱き炎となりて未来を燃や し 学術文化と連帯の力たから かに 創り上げろ希望と変革の 大地を
22	1981年 （6/9-14）	われらとわれらの子孫のため に	
23	1982年 （6/8-13）	輝く地球と未来をわれらで	
24	1983年 （6/7-12）	改造	
25	1984年 （6/5-10）	反攻	
26	1985年 （6/4-9）	刻みこめ 青春の鼓動を 新 たなる胎動に	
27	1986年 （6/10-15）	熱帯雨林、諸子百家。	
28	1987年 （6/9-14）	脱	
29	1988年 （6/7-12）	我がまま開発	
30	1989年 （6/7-11）	すばらしい	

（各年『名大祭パンフレット』より作成）

くなる傾向が、この時期になつてさらに強まったという点にあります。

◆「学長あいさつ」からみた名大祭

テーマが簡潔化されるということは、その内容が抽象化されていることを意味します。『広辞苑』（第五版）によると、「抽象的」とは「現実から離れて具体性を欠いているさま」であるとされています。では、この時期におけるテーマの簡素化は、現実の名大祭の具体性とどのような関係にあつたのでしょうか。

諸君、今年の名大祭のテーマをえらんで、『脱』という。それがたんなる逃避に非ず、消極的な過去の便宜的清算に非ず、むしろ飛躍して視野を広め、名実ともに充実し、自己を呪縛から解放し、以て大いにはばたく契機たらしやうとするためには、ここにいかなる祭典を持つべきか。テーマがいたずらに名大祭の実態から遊離し、たんなる飾りとして終わらないためにも、私はあえて名大祭の実態を諸君に問いたい。……(略)……名大祭は、名古屋大学の祭りであり、名古屋大学学生の祭典である。卑小と幼稚な自己陶醉をさらけ出して、それを祭りと錯覚して恥じないようなおろかさは、万々諸君のなかには存在しないと信じるが、呉々も名大祭を大切にしてくれたまえ。今年の名大祭に「脱」の精神がい

かにつらぬかれ、いかに表現されるか、私は期待をもって見守る。名大祭に幸あれ。

これは、第二八回名大祭パンフレットに掲載された飯島宗一学長のあいさつ「名大祭に寄せらる」にある一節です。ここには、名大祭のあり方に対して警鐘を鳴らしながらも、期待を寄せる学長の真情が示されているように思います。

#### ◆テーマ企画の減少

一九七〇年代以前の名大祭では、毎年決められるテーマがその年の名大祭そのものを規定するほどの性格をもっていました。したがって、名大祭ではそのテーマに直接に関連する中心的な企画が行なわれることが当然であるという認識が当時の学生にはあったのだと思います。

実際、当初の名大祭ではその年のテーマに関連した講演会・討論会やシンポジウムが大々的に開催されていました。むしろ、そうした学術的あるいは文化的な企画が中心に据えられたうえで、各学部企画・サークル企画やアトラクションなどの周辺の企画が展開されていたといえます。

しかしながら、時代の推移とともに、状況は少しずつ変化しています。たとえば、名大祭テーマに真正面から取り組む講演会やシンポジウムなどの全学企画は、第二一回名大祭以降は



第27回名大祭風景（『'87名古屋大学卒業アルバム』より）

次第に行なわれなくなっています。ただし、誤解を避けるために述べておきますが、一九八〇年代以降にすべての全学企画がなくなってしまうわけではありません。もちろん、第二二回以降にも全学的な「テーマ」企画は行なわれています。しかし、それらのほとんどは、名大祭テーマとは直接的な関連を必ずしも持たない「テーマ」を扱った講演会やシンポジウムとなっています。

#### ◆一九八〇年代名大祭の特徴

第二六回名大祭パンフレットの目次には、「オムニバス企画」という項目が登場します。この項目に掲載されている企画をみると、いくつかの新しい企画もある一方で、一九七〇年代や一九六〇年代から行なわれてきた伝統的な企

画が多く含まれていることに気づきます。ここに、この時期の名大祭の特徴の一つを見出すことができると考えられます。

「オムニバス」という語は、「映画などで、いくつかの独立した短編を並べて一つの作品にしたもの」を意味します。名大祭では、第一回当時から限られた日程のなかで数多くの企画が行なわれてきました。その点からみると、名大祭そのものが一つのオムニバスであるといえるかもしれません。しかし、学生運動の高まりを背景に展開された一九六〇年代における名大祭では、エネルギーの結集や連帯がキーワードとされるなかで、さまざまな企画が一つのテーマを共有しながら全体としての名大祭が形づくられていたという印象を強く受けます。こうした傾向は、一九七〇年代における名大祭においても共通していると思います。

これに対して、「多様化の時代」といわれた一九八〇年代に入ると、次第に状況は変わってきたようです。一九八三（昭和五八）年の第二四回名大祭パンフレットには、本部実行委員長による次のようなあいさつ文が掲載されています。

青年向けの情報誌や娯楽雑誌などに見られる、祭としての要素のみが強調されてきた大  
学祭像によつて、ともすれば見失われがちな大学祭の役割を、私たちは、今、もう一度思  
い起こしてみなければなりません。

さきに紹介した飯島学長による第二八回名大祭あいさつとこの指摘をあわせ読むと、この時期の名大祭が、抽象化されたテーマのもとで、よい意味で統制されることもなく、単に「オムニバス」的な傾向を強めていたことが浮き彫りにされるのではないだろうか。

## 六、時代を映す名大祭④—一九九〇年代

### ◆第三一回〜第四三回のテーマ

名大祭一覧（4）には、一九九〇年代以降における名大祭のテーマなどを示しました。

この時期は、一九九七（平成九）年の第三八回名大祭を除くと、一九八〇年代のそれとほぼ同様にサブテーマを設けることなく比較的短いメインテーマが続いています。